

吉野における讚歌の継承

遠山 一郎

一 赤人作吉野讚歌

万葉集卷第六は、養老七年（七二三年）五月吉野行幸時の歌を、冒頭に据える（九〇七〜九一六）。この冒頭の歌は、二群からなり、長歌に反歌を付けた形をとにも取る。

卷六は、さらに二つ、吉野における讚歌を収録する。一つは神龜二年（七二五年）五月行幸時の歌（九二〇〜九二七）、二つは天平八年（七三六年）六月行幸時の歌（一〇〇五〜一〇〇六）である。これらはすべて、冒頭の作品と同じく、長歌に反歌を付ける形を取り、最も格の高い形式に整えられている。

これら三度の行幸は行幸する人物を異にする。一度目の養老七年（七二三年）時の天皇は元正天皇であり、以後の神龜二年（七二五年）時、天平八年（七三六年）時の天皇が、ともに聖武天皇である。天皇を異にしなから、元正天皇とつぎに即位した聖武天皇とが相次いで吉野を訪れ、そのおりに歌人たちが長歌、反歌からなる歌を詠む、という行事の形は、行幸する天皇の相違を越える共通点を、見て取らせる。

共通点が想起させるのは、持統天皇吉野行幸時における、柿本人麻呂作の讚歌（卷一―三六―三九）である。この讚歌が、

長歌、反歌の各々を備える二群から成る。人麻呂作の讚歌が持統四年（六九〇年）前後の作品であり、以後、吉野において長歌、反歌による讚歌は作られていないので、ほぼ三十年を隔てた元正朝と聖武朝とに至り、吉野における讚歌が企てられたわけである。

ところが、元正、聖武朝吉野讚歌は、人麻呂の作品と異なり、複数の歌人たちによつて詠まれている。計三回のうち、第一回が笠金村と車持千年と、第二回が笠金村と山部赤人と、そして第三回には赤人一人によつて、歌が作られている。他に、大伴旅人が神龜元年（七二四年）三月聖武天皇吉野行幸に際し、長歌、反歌による讚歌を残す（卷三―三二五―三二六）。この讚歌は題詞に小書きで、「いまだ奏上を経ぬ歌」と記されており、公表されなかつたらしい（『万葉集私注』、等）。旅人の吉野讚歌が卷六に収められず、卷三に載るのは、場の相違に関わつて、旅人の吉野讚歌が別に扱われていたことを知らせる。

卷三に載る旅人作吉野讚歌を除き、卷六の収める元正、聖武朝吉野讚歌のなかでは、第三回に赤人が一人で詠んでいる点が、他の二回に相違する。しかも、人麻呂作吉野讚歌が二つの歌群からなるのと異なり、第一回の金村、千年の作品は、合わせて

二群の形をもつものの、二人各々が一群を詠むだけである。第二回の金村の作品も、一群にとどまる。対して赤人は、第二回に一人で二群の歌を残す。

赤人のみが、人麻呂と同様、二群の長歌、反歌を作る点は、他の歌人以上に、赤人が人麻呂の作品に強い関心を寄せていたことを、形の上で窺わせる。加えて、第三回に赤人の詠む歌が、長歌、反歌の一群のみでありながら、題詞が「応詔」と記す。他の二回には、「詔」が伴わない。

赤人一人が、二群の長歌、反歌を試み、他の歌人たちには降されてない「詔」を負わされていることは、元正、聖武朝吉野讚歌中で、赤人の作品がことに重要な位置を占めることを告げる。

二 赤人による吉野讚歌の継承

山部赤人作吉野讚歌は、神龜二年（七二五年）聖武天皇吉野行幸の折りに、はじめて現われる。巻六はこの時の歌を、笠金村作、山部赤人作の順に収め、題詞にこう記す。

神龜二年乙丑の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に、

笠朝臣金村が作る歌一首并せて短歌

右の題詞が導く金村の長歌、反歌（九二〇）（九二二）について、さらに一つ、題詞が掲げられ、赤人の長歌、反歌二群を載せる。

山部宿祢赤人が作る歌二首并せて短歌

やすみしし 我ご大君の 高知らす 吉野の宮は たたな
づく 青垣隠り 川なみの 清き河内ぞ 春へは 花咲き

ををり 秋されば 霧立ちわたる その山の いやしくし
くに この川の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は
常に通はむ

反歌二首

み吉野の象山の際の木末にはここだも騒く鳥の声かも

（九二四）

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば
鳴く

（九二五）

やすみしし 我ご大君は み吉野の 秋津の小野の 野の
上には 跡見据ゑ置きて み山には 射目立て渡し 朝狩
りに 鹿猪踏み起こし 夕狩りに 鳥踏み立て 馬並めて
御狩りぞ立たす 春の茂野に

（九二六）

反歌一首

あしひきの山にも野にも御狩り人さつ矢手挟み騒きてあり
見ゆ

（九二七）

右は、先後を審らかにせず。ただし、便をもちての故
に、この次に載す。

まず第一歌群長歌は冒頭四句において、「吉野の宮」を提示する。以後に続く「青垣隠り」、「清き河内ぞ」、「花咲きををり」、「霧立ちわたる」は、冒頭部による建て物の提示から対象を広げ、「宮」のあたりを広く含む一帯に、叙述を及ぼす。長歌の歌う対象がやや広いことは、反歌二首によって確かめられる。

第一反歌は、「み吉野の象山の際」を詠み込む。「吉野の宮」の地が宮滝のあたりであるとすれば、「象山」は吉野川を隔てる

所である（『万葉集注釈』、等）。そのうえ、歌われているのは、「ここだも騒く鳥の声」である。「鳥の声」の響き渡る「み吉野」の空間が、「象山」のあたりへ広げられて、歌のなかに設けられている。第二反歌がやはり鳥を配しつつ、「川原」を詠むのも、建て物に限定されない、宮のあたり一帯が、作者の描く空間であることを知らせる。

人麻呂作吉野讚歌も、第一歌群において、広い空間を設定する。

やすみしし 我が大君の きこしめす 天の下に 国はし
もさはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野
の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば も
もしきの 大宮人は 舟並めて 朝川渡る 舟競ひ 夕川
渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知ら
す 水激く 滝の宮処は 見れど飽かぬかも

（巻一一三六）

反歌

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり
見む

（三七）

長歌（三六）が、「瀧之宮子波は見れど飽かぬかも」と結び、称える対象に接尾語「子」を伴わせる。反歌（三七）は「吉野の川」を詠み（橋本達雄「人麻呂の歌集と伝記」『柿本人麻呂』所収）、結句「またかへり見む」によって、川への称賛を明示し、長歌の「宮処」に冠せられている「瀧」に力点を置きつつ、称える対象を、やはり広く設ける。

赤人歌の第一歌群の称えかたを、人麻呂の歌いかたの影響という範囲にとどめるわけにはゆくまい。というのは、古事記上巻に、つぎの記述が見出されるからである。

ここに、詔らししく、「ここは韓国に向かひ、笠沙の御前に真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国ぞ。かれ、ここはいと吉き地」と詔らして、底つ石根に宮柱太知り、高天原に水椽高知りて坐しき。

地上界に降ったニギは、宮を営むに当たり、土地の吉さを最初に称え、その吉き地に立派な宮を作る。この記述中で宮を称えていることばの一つである「高知り」が、当面の赤人の長歌第三句「高知らす」に現われる。その「高知り」は、さきの人麻呂の歌の長歌でも、第二四句「いや高知らす」中に用いられている。加えて、「高知り」とともに、ニギの宮を称えることばである「宮柱太知り」が、やはり人麻呂の長歌第十三、十四句「宮柱 太敷きませば」という部分に、形をすこし変えられて現われる。赤人の歌は、繰り返し使われていた宮讚めのことばタカシルを、長歌に取り入れつつ、宮所をも称えていた、より古い発想との接触を、人麻呂を介して保つ。この古い発想にに応じて、赤人の付した反歌二首が呪術的側面を帯びる。

反歌二首は、「象山」（第一反歌）から「川原」（第二反歌）へ場を変え、山と川とを対比させながらも、結句で鳥の声をそらつて詠む。同じ赤人が聖武天皇紀伊行幸時に歌った長歌、反歌中の反歌が、やはり鳥を詠む。

若の浦に潮満ち来れば瀉をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る

（九一九）

長歌(九一七)が結びに、「神代より　しかぞ貴き　玉津島山」と述べ、行幸地への称賛を表立てた後に、右の反歌は位置を占める。この反歌においても、鳥が素材に取られているばかりでなく、その「鶴」が「鳴」にしている。青木生子「赤人における自然の意味」(『日本抒情詩論』所収)、伊藤博「赤人の長歌と反歌」(『古代和歌史研究6』所収)の指摘するように、鳥の声を詠み込むのは、行幸地のにぎわいの表現と解される。実際、続く第二歌群において、反歌が「御狩り人……散動ちやうどう而有ちやうみ所見」と歌い(九二七)、声を伴う人々の動きを詠み込み、同一の発想を引き継ぐ。二つの歌群のなかでも、鳥の声を素材に取る第一歌群反歌二首が、あたかも景を詠み、吉野一帯の静けさを表現するかのような声調を響かせるけれど(島木赤彦『万葉集の鑑賞及び其批評』、斎藤茂吉『万葉秀歌』、等)、人麻呂の歌そして二ニギの宮所を称える表現に連なる呪術的性格が、基本をなして長歌に応じている点を、見落とすわけにゆかない。

二首の反歌ともども、第一歌群が宮と宮の地とを称賛するに對し、第二歌群は称える対象を天皇へ転ずる。第二歌群長歌は、この主題を表現するに当たり、冒頭の提示する「大君」が狩りをすることを述べる。反歌の「御狩り人……騒さわきてあり見ゆ」は、狩りの盛んである様を詠み、ひいては「御狩り人」を動員する「大君」への称賛を表わす。人麻呂の歌の第二歌群(巻一―三八―三九)も、天皇への称賛を主題に立て、赤人歌第二歌群と軌を一にする。赤人の歌は、吉野における二群の長歌、反歌という形のみならず、さきに検討した第一歌群の主題とともに、第二歌群の主題においても、人麻呂の歌を踏襲する姿勢を、

あらわに見せる。赤人の二群の作品は、吉野の宮と宮所とへの称賛、ついで天皇への称賛、という順に並び、人麻呂作吉野讚歌二群に倣う。

赤人の時代に万葉集巻一、巻二はすでに編纂されていた、と推定されるから(伊藤博「万葉集の生いたち(一)」、『新潮日本古典集成 万葉集 一』所収)、巻一に収められている人麻呂作吉野讚歌は、赤人そして朝廷の人々に、おそらく今に伝わる形で、享受されていたであろう。口誦で享受されたことが想像されないではないけれど、大宝二年(七〇二年)文武天皇吉野行幸以後、ほぼ二十年間吉野行幸がない。古歌を誦する習いが摘出されるとはいえ(巻十五―三六〇―二―三六一、等)、吉野の山、川の吉さを押し出す讚歌が、吉野以外の地でしきりに口誦された、とは考えにくい。行幸の空白と吉野讚歌の三十数年の隔たりとは、歌集に記録された形による享受をやはり考えさせる。

しかも、赤人の二群の長歌冒頭がともに、ヤスミシシという枕詞を用い、各々を「八隅知之」(九二二)、「安見知之」(九二六)と書く。人麻呂の二群の長歌も、各々の冒頭の枕詞ヤスミシシを、「八隅知之」(三六)、「安見知之」(三八)と記し、赤人歌の各長歌の表記との間に一致を見せる。人麻呂が、一つの枕詞に異なる意味を持たせて書き分けたのを(沢瀧久孝「枕詞を通して見た人麻呂の独創性」『万葉集の作品と時代』所収)、赤人が、すくなくとも表記のうえで、踏襲した(清水克彦「赤人の吉野讚歌」『万葉論集 第二』所収)と考えられる点も、右の想定を支持し、かつ、人麻呂作品に倣う意図を、一層際立た

せる。

赤人の二群の歌々は、形と主題とに渡つて、人麻呂作品を繼承する姿勢を見せるものの、赤人の称えかたと人麻呂の称えかたとは、内実を異にする。相違の第一は、歌群の構成である。

人麻呂の歌の第一歌群長歌では、第十三、十四句「宮柱太敷座波」の二句が、以後に展開する「大宮人」の奉仕を導く。「太敷座波」の条件句は天皇の行為を表わすから、天皇の行為が原因をなして歌を展開させる。「宮処」への称賛を主題に立てつつ、持統天皇の営みが歌を押し進める構成の背後に、西沢一光「人麻呂「吉野讚歌」の方法とその基底」(国語と国文学一九九〇年十二月号)は、全てを束ねる「大君」の存在を透視する。

対する赤人の歌の第一歌群は、冒頭から第四句までの「やすみしし 我ご大君の 高知らす 芳野宮者」という部分で、係助詞ハによつて主題を示したのち、この宮に関して叙述する。

赤人歌第一歌群の宮の営みも、やはり「大君」の行為であるけれど、続く山と川とは、自然の存在として描かれ、「大君」による宮の営みの影響を受けない。山と川との代表する宮の地が、「大君」の営みから距離を置かれる結果、第十三句以下の「その山の いやしくしくに この川の 絶ゆることなく」という称えことばのもとで、結びが「大宮人」の奉仕を述べても、人々の奉仕は、「大君」の営みとの間に、直接的な接点を与えられない。接続助詞バの表わす条件句によつて、人麻呂が「大君」に全てを取斂させる構成を作り出したのと異なり、赤人は「大君」の営む「吉野の宮」を、係助詞ハで提示することによつて、宮所の描写を、吉野の自然へ拡散させる。山と川との対句が整わ

ない(伊藤博「万葉集全注 巻第一」、等)にもかかわらず、人麻呂歌第一歌群が、歌を「大君」に集中させて躍動的な構成を取るに對し、赤人歌第一歌群は、山と川との対句を整えつつ(『注釈万葉集「選」』橋本達雄注)、「大宮人」の奉仕を「大君」による宮の営みに並列させて、静的な構成を見せる。

接続助詞バと係助詞ハともたらず各々の構成は、第二に、宮を営む「大君」の性格づけの相違に連なる。人麻呂、赤人ともに、第二歌群において天皇への称讚を主題に立てるから、性格づけの問題は、ともに第二歌群に主として関わる。ただ、構成の相違が、各々の第二歌群でも、やはりバとハとの導く構文によつて、まったく同様に保たれている点を、言い添えておかなければならない。前掲西沢論文が読み取る「大君」の有りかたも、二群を貫く視点によつて、把握されている。

人麻呂の作品と赤人の作品とが、各々の構成で二群を貫きながら、一方の人麻呂の歌は第二歌群に至り、神々に君臨する神として、持統天皇を造形する(遠山一郎「吉野における持統天皇の造形」文学一九八九年十月)。他方、赤人の描く聖武天皇は、二群を通して神の性格を帯びない。称える対象を天皇に絞る第二歌群では、長歌が天皇の行動を、「御狩りぞ立たす」と詠み、反歌が「御狩り人……騒きてあり見ゆ」と歌う。狩りをする聖武天皇は、「御狩り人」と同じ次元に置かれており、「人」の域にとどまる、と解される。

この吉野讚歌の翌年神龜三年(七二六年)聖武天皇が印南野に行幸した際、赤人は歌を詠んだ。

やすみしし 我が大君の 神隨 高知らせる 印南野の 邑

美の原の ……

(巻六一九三八)

右の歌いかたは、聖武天皇を神として扱う。さらに、おそらく養老年間に、『万葉集年表』頭注、赤人の作った伊予温泉の歌の長歌が、天皇を神と呼ぶ。

皇神祖之 神乃御言乃 敷きいます 国のことごと 湯はしも さはにあれども …… (巻三一三二二)

ただし、「皇神祖之神乃御言」は、「皇神祖」を視点に置いて天皇を「神のみこと」と表現し、対象を聖武天皇に限っていないので、当面の問題とは別に扱わなければならない。

聖武天皇を神として描く印南野行幸歌のほぼ十年後、天平八年(七三六年)六月聖武天皇吉野行幸時に、赤人は再び長歌、反歌を詠む。この時には、赤人は聖武天皇を神として扱わず、聖武天皇の性格づけに揺れを見せる。同じ天皇の行幸歌のなかで、吉野行幸時には二度とも、聖武天皇を神と叫ばない歌いながら、形、主題のうえで人麻呂の吉野讚歌を踏襲しながらも、「大君」の捉えかたにおいて、人麻呂とは異なり、人の域にとどめる造形を、吉野で保とうとする赤人の姿勢を、垣間見させる。神亀二年(七二五年)の歌の第二群で、聖武天皇を人の域にとどめて称える姿勢は、赤人が吉野で再び詠んだ長歌、反歌に、底を流れていた理由を現わす。

三 神の時代を継ぐ歌

天平八年(七三六年)六月の行幸時には、赤人だけが歌を残す。形は二群でなく、長歌、反歌各一首から成る。

八年丙子の夏の六月に、吉野の離宮に幸す時に、山部

宿祢赤人、詔に応へて作る歌一首并せて短歌

やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は 山高
み 雲ぞたなびく 川早み 瀬の音ぞ清き 神さびて 見
れば貴く よろしなへ 見ればさやけし この山の 尽き
ばのみこそ この川の 絶えばのみこそ ももしきの 大
宮所 やむ時もあらめ (巻六一一〇〇五)

反歌一首

神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川をよみ (二〇〇六)

長歌は、「宮」と「大宮所」とへの称賛を表に立て、吉野における伝統的な主題の踏襲を、ただちに見て取らせる。主題のみならず、山と川とを対比させる表現においても、人麻呂そして赤人自身がすでに実行した技法を、長歌は用いる。

続く反歌は第四、五句中で、さきに検討した宮讚めの語句「高知ら」を使いつつ、「山川をよみ」で宮の地を称える。長歌の主題を引き継ぐ第四、五句は、用語、主題ともに、取り立てて新しい表現を含まない。ところが、この二句は、第一句から第三句までの表現のもとで、新たな視点を導き入れる。

第四句「高知らせるは」は、第一句から第三句「神代より吉野の宮にあり通ひ」を受け、長歌の述べない時代のことを歌う。

「高知らせるは」は、長歌冒頭句「やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は」との関連を窺わせるものの、「神代より」と「あり通ひ」との二句は、過去に重心を置く行動を述べ、「我が大君」である現天皇を、前面に立てない。とはいえ、長歌と反歌とが関わりを持たないのではない。現天皇である聖武天皇

の宮む宮が未来に向かつて尽きないことを、長歌が詠み、反歌が逆に過去へ向かつて時を遡り、長歌と反歌とが時を両方向へ広げあう。補い合いの關係のもとで、長歌の詠まない時代のことを、反歌は前面に押し出す。

長歌の言及しない過去は、何の説明をも伴わず、「神代」とだけ言われる。限定を受けない「神代」がどのような時代を表わすのか、にわかには判定しがたい。万葉集におけるカムヨを省みると、中大兄作三山歌中の用例が、年代の確かな例のなかではもつとも古い、と推定される。

香具山は 歌傍を惜しと 耳成と 相争ひき 神代かむよ従よか
くにあるらし いにしへも しかにあれこそ うつせみも
妻を争ふらしき (巻一—一三)

三山歌の長歌は「神代」を「いにしへ」に言い換え、「うつせみ」に対比させる。この対比の内実が、当面の赤人の作品に通ずる。すなわち、「神代」、「いにしへ」の妻争いが、「うつせみ」の妻争いの起源であると三山歌長歌が語ると同様に、当面の赤人の「神代」も、今の「吉野の宮」の良さが「神代」以来の「山川のよ」さに起源を持つ、という文脈に現われる。ならば、この赤人の「神代」は、三山歌長歌の「神代」と同じく、「うつせみ」の起源を成す時代、という規範の位置に置かれている、と考えられる。赤人自身、神亀元年(七二四年)聖武天皇紀伊行幸時に、「神代かむよ従よしかぞ貴き 玉津島山」(巻六—九一七)と詠み、同じ用法の「神代」を、他にも残す。

同様のカムヨが、集中に十例ほど拾われる。なかで、当面の文脈に近い一例を掲げる。

浜清み浦うるはしみ神世かむよ自千舟の泊つる大和太の浜 (巻六—一〇六七)

「浜」を称えるに際し、「神代より」の良さを引き合いに出す発想が、赤人の当面の歌いかた、そして紀伊行幸時の歌いかたに合致する。

発想の次元に抽象化すれば、古事記は、人の時代の天皇の權威を、神の時代の神に求めており(吉井巖「ヤマトタケル系譜の受容」『ヤマトタケル』所収、等)、三山歌などと当面の反歌とに通ずる発想を取る。他方、主題の次元では、古事記が天皇の神聖を主張し(吉井同書)、三山歌などが旅先の地を讃め(伊藤博「遊宴の花」『古代和歌史研究』3)所収、等)、各々の主題のもとで、各々がたがいに異なる内容を持つ。すると、発想に共通点が認められても、吉野に触れず、主題を異にする文脈中の「神代」に、当面の赤人の「神代」を、ただちに当てはめるわけにゆかない。

さらに、三山歌のばあい、香具山、歌傍山、耳成山(長歌)そして印南国原(第一反歌)という神々が名を挙げられる。浜を称える一〇六七では、長歌(一〇六五)が「八千杵の 神の神代より」と歌い起こす。古事記も、天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神を冒頭に記し、神々の名を以下にも列挙する。対して、どの神の活動した時代を作者が「神代」と呼ぶのか、赤人の吉野讚歌は、長歌、反歌ともにまったく語らない。

神の名こそ現わさないものの、反歌は「神代」に行われた行動を述べる。第二句から第四句「吉野の宮にあり通ひ高知らせる」である。特定されている「吉野」の地に着目するのであれ

ば、神武天皇が倭にはいるに当たつて吉野を通り(記神武)、同天皇が吉野の地を見(神武紀)、応神朝に吉野の国果が服属し(記紀応神条)、雄略天皇はここを訪れている(記紀雄略条)。「万葉代匠記」初稿本が、養老七年(七三三年)吉野行幸時の金村歌長歌(巻六一九〇六)に現われる「神代」に注を付け、神武天皇以下のことと解し、窪田空穂『万葉集評釈』が、当面の反歌の注に、応神天皇の時代を挙げるけれど、古事記、日本書紀において、いづれも人の時代の人の活動として記されており、「神代」にそぐわない。しかも、どの文献にも、神々の活動の記述に、吉野の宮のことが見出されない。すると、当面の「神代」は、いづれかの神の時代に、吉野の宮の営みを持ち込んだ、独自の表現、と解する必要がある。

そこで注目されるのが、神亀二年に赤人が形から主題に及んで依拠した人麻呂作吉野讚歌に歌われた、宮の営みである。この讚歌の第二歌群は神だけを登場させ、神による吉野の宮の営みを歌う。

やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせずと 吉野川
たぎつ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見を
せせば たたなはる 青垣山 山神の 奉る御調と 春へ
は 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり(一云黄葉か
ざし) 行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上
つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 依
りて仕ふる 神乃御代鴨

(巻一一三八)

反歌

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に舟出せずかも

(三九)

長歌が結句に「神の御代かも」と述べ、持統天皇を吉野の空間にとどめず、時間に広げて歌い収めている点が、ことに注意される。吉井巖『万葉集全注 巻第六』が指摘し、神野志隆光「聖武朝の皇統意識と天武神話化」(柿本人麻呂研究)所収の支持するごとく、赤人の歌う「神代」は、この「神の御代」ではないか。

カムヨは、三山歌長歌が典型を示すように、遙かに遠い時代、イニシヘでありつつ、ウツセミの起源という位置を占める。ところが、人麻呂が「神の御代」と歌った持統天皇の時代は、聖武天皇にとつて曾祖母の時代であり、ほぼ五十年前の時代であるにすぎない。さらに、人麻呂の歌う「神の御代」は、現天皇である持統天皇が「神」と呼ばれたのを受けける表現であり、持統朝の現在を表わす。人麻呂の「神の御代」は、カムヨにあらざるウツセミであり、現在に満ち、カムヨの帯びるイニシへの影を伴わない。この「神の御代」は、赤人の「神代」に、ただちには移行しない。

人麻呂の歌いあげた「神の御代」が、聖武天皇にとつて曾祖母の時代にとどまるとはいえ、赤人の心理的な時間意識が、五十年という尺度で尽くされるとは限らない。事実、赤人は次の歌を残す。

もしきの大宮人の熟田津に船乗りしけむ年の知らなく

(巻三一一三二三)

つとに指摘されてきたように(「万葉考」、等)、この歌は額田王の歌を踏まえる。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出で
な (巻一—八)

額田王のこの歌は斉明朝の作である。赤人が三二三を詠んだ年次が確かでないけれど、おそらく養老年間であろう(『万葉集年表』頭注)。赤人の歌と額田王の歌とは、六十年ほどを隔てるだけである。この隔たりを、結びで「年の知らなく」と表現する赤人の意識は、斉明朝の事跡とその表現とを、外在的時間以上に遠く見やる。

加えて、土理宣令が、おそらく神亀年間に(『万葉集年表』、
こう歌う。

み吉野の滝の白波知らねども語りし継げばいにしへ思ほゆ
(巻三—三三)

「み吉野」で思い起こされている「いにしへ」は、天武天皇、持統天皇のころの事柄を言うのであろう(『新潮日本古典集成 万葉集』、等)。作者である土理宣令は、聖武天皇の東宮時代に、聖武に侍している(統日本紀養老五年正月)。聖武の周辺に漂う、このような「いにしへ」回顧が赤人に共有されたとしても、不思議ではない。

外在的時間とは別に、過去を遠くに見る捉えかたを、赤人が示していたことと共に、聖武周辺の持つ「いにしへ」意識が知られると、当面の作品が現在を表に立てない点が注意を引く。

長歌は、前半に吉野の宮と地との空間を称えたのち、第十三句「この山の」以下の後半で、時間を叙述する。後半の表現は、「この山の尽きば」、「この川の絶えば」、「大宮所やむ」という否定的側面を連ね、これら否定の裏返しによって「大宮所」の永

続を祝う。現在を修辭的に否定する文脈に続いて、反歌に「神代」が現われるとき、この「神代」には、現在の後退を埋めるに足る、大きな価値が求められよう。はたして反歌は、「神代より」という第一句に反歌全体を包み込ませる構文のもつて、カムヨの規範としての性格を、前面に立てる。このように現在を覆い、長歌の祝う未来まで連なる「神代」が、不特定な神々の時代を言うにとどまり、具体的な神を提示しない、とは考えにくい。

歌から目を転ずると、この作品の題詞は「詔に応へ」と記す。前回の赤人の二群の歌々も朝廷の人々に披露されたであろうけれど、今回は聖武天皇の「詔」を負う。他の歌人の作がこの題詞のもとに記されていないから、「詔」は赤人に降された、と推定される。赤人に「詔」がことに発せられたのは、前回の赤人の詠みぶりに対する評価が高かつたからに違いない。前回の作品が人麻呂の作を確かに踏まえていた以上、「詔」を発した聖武天皇と朝廷の人々とは、今回もその方向を期待したのである。赤人は期待を念頭に置いたであろう。

吉野における人麻呂作の讃歌を、朝廷の人々と赤人とが基準に据えることは、聖武天皇の位置にも合致する。すなわち、人麻呂の称えた持統天皇は、天武皇統を草壁皇子から文武天皇へ継がせる意図のもとに即位し、文武天皇没後、元明天皇、元正天皇が即位したのも、文武天皇の子である聖武天皇への皇位継承を目指した、と考えられる(井上光貞「古代の女帝」『日本古代国家の研究』所収、上田正昭「日本の女帝」、等)。天武皇統を確立した壬申の乱の勝利が、吉野の挙兵に始まったからには、

聖武天皇が天武皇統に属することを、ことに吉野において歌うことは、聖武天皇の存在の根本に関わる重要事だったであろう。持統天皇を吉野において称える歌を踏まえる表現は、神野志論文の指摘するごとく、持統天皇の権威を、同じ皇統を継ぐ聖武天皇に付与する祝言として働く。

背景に加えて、結局「山川をよみ」が、歌に用いられた語を踏まえる奥行きを、見て取らせる。すなわち、人麻呂の讚歌第二歌群が、長歌、反歌ともに、「山川」という表現を使っていた。ただ、人麻呂の描いた「山川」は、「山神」、「川の神」である。これと異なり、当面の「山川」に神の性格は窺われない。しかし、三山歌における三山と印南の地とがかつて神であったように、「神代より」の修飾を受ける文脈中の「山川」がかつて神であった、と解することができる。

赤人の歌う「神代」が、人麻呂の称えた「神の御代」を受け、表現であることによつて、続く「吉野の宮にあり通ひ」は、持統天皇以後の、歌を伴う御幸をも指しつつ、聖武天皇と朝廷の人々とに、往時の姿を具体的に思い描かせる。「詔」を受けた赤人の歌は、人麻呂の歌を踏まえることによつて、吉野という天武皇統の原点と聖武天皇とを、神の時代からの連続という形で、深く結びつける働きを果たした、と考えられる。

四 人麻呂神話の古典化

「神乃御代」を「神代」と言い換える表現は、格動詞「乃」と接頭語「御」とを除くだけの措置ではなく、「神乃御代」と表現された持統天皇の時代の位置付けを、転換させる。述べたこ

とく、カムヨはウツセミの規範の位置を占める。赤人の歌いかたは、持統天皇の時代を聖武天皇の時代に結びつけるのみならず、持統天皇の時代を規範の位置に置き、今の聖武天皇の営みに、神聖な権威を付与する作用を及ぼす。

吉野の宮の営みに対する神聖な権威の付与は、赤人だけのしわざではない。天平八年（七三六年）の赤人の歌に先立つこと十三年、養老七年（七二三年）元正天皇吉野行幸時に、金村が詠んだ歌の長歌は、やはり「神代」の語を用いつつ、吉野の宮の営みを称える。

滝の上の 三船の山に 瑞枝さし 繁に生ひたる 梅の木
の いや継ぎ継ぎに 万代に かくし知らさむ み吉野の
秋津の宮は 神からか 貴くあるらむ 国からか 見が欲
しからむ 山川を 清みさやけみ 諾之神代從 定めけら
しも (巻六一九〇七)

結びの部分が、ヲ……ミの形のなかに、「山川」を配し、「神代從」によつて「宮」の営みの起源を説く。この歌いかたが、天平八年（七三六年）の赤人の反歌（一〇〇六）における「神代より……山川をよみ」という表現の先駆けをなしていることが、ただちに読み取られる。

金村による「うべし神代ゆ」の歌いかたが、赤人作品の先駆けをなすことが知られると、金村の歌う「神代」も、人麻呂の「神の御代」を念頭に置くのではないかと予測される。実際、金村の長歌の述べる「神代ゆ定め」は、吉野の宮の営みを言い、赤人のばあいと同様に、古事記そして日本書紀における神の時代の記事に見出されない行為を、「神代」に含める。養老七年（七

二三年)元正天皇吉野行幸が、翌年神龜元年(七二四年)の聖武天皇即位への布石と覚しい点を(清水克彦「養老の吉野讚歌」『万葉論集 第二』所収、等)考慮すれば、養老七年(七二三年)に歌われた金村作讚歌が、「神代ゆ」と歌いつつ、聖武天皇吉野行幸時の歌の先駆けをなし、ついで、天平八年(七三六年)の赤人作讚歌が、聖武天皇の営みを称えて「神代より」と詠み、金村作歌を倣う点には、歌々の間の脈絡が辿られる。

人麻呂の歌いかたを踏まえながら、赤人が今の聖武天皇を吉野において神として扱わないのは、原点をなす持統天皇ひいては天武天皇の時代を、「神代」に位置付ける文脈のなかに、別の神を持ち込みにくいからであろう。人麻呂自身、草壁皇子挽歌、高市皇子挽歌において、天武天皇を神の時代の神として描くことよって、皇太子草壁皇子と太政大臣高市皇子とを權威づけながら、草壁皇子と高市皇子とを人として表現する(遠山一郎「天武二皇子の挽歌」国語と国文学一九九二年一月号)。

今の元正天皇と聖武天皇とを人の域にとどめつつ、人麻呂の歌を歌群の形から語に及ぼして踏まえる表現によって、金村そして赤人の詠む吉野讚歌は、人麻呂の作品を規範として立てる歌の流れの典型を示す。古事記神話、日本書紀神話の各々(神野志隆光「神話研究の方法をめぐる」比較文学研究一九九一年十一月)とは別に、天武系天皇、皇子を、神々の神として造形する人麻呂の神話は、元正、聖武朝の歌の営みによって、継承されるのみならず、古典の地位を与えられようとしていたように思われる。

(愛知県立大学教授)